



## 院籍「大人先生傳」 訳注

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野, 杏紀, 平木, 康平 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00004360">https://doi.org/10.24729/00004360</a>

大阪府立大学人文学会 人文学論集  
第三十二集（二〇一四年三月）  
抜刷

阮籍「大人先生傳」訳注

水野杏紀  
平木康平

# 阮籍「大人先生傳」訳注

水野杏紀  
平木康平

## 一、はじめに

中国の三国時代は、魏、呉、蜀が鼎立した時代である。魏（二二〇—二六五）の末、竹林に集まり、清談を行ったとされる人々がいた。それは、いわゆる竹林の七賢と称された、阮籍、嵇康、山濤、劉伶、阮咸、向秀、王戎たちである。清談とは老荘思想などをもとにし、当時の知識階級の人々による、世俗を離れてくりひろげられた談論のことをいう。彼らに関するエピソードや清談の一端は、南宋の劉義慶が編纂した『世説新語』などに記されている。

竹林の七賢の中心的存在であったのが、阮籍（二一〇—二六三）と嵇康（二二三—二六二）であった。なかでも、阮籍は老荘易の三玄の学を重んじ、儒教的な礼法を好まず、世間の常識にとらわれることを

嫌い、酒をこよなく愛し、琴を弾じた人物として知られる。彼の振る舞いは、世間の人々の目には奇異に映ったが、たとえば、礼俗の士をみると白眼を以て対した、「白眼視」の話は有名である。

彼の著述としては、代表的な作品に、五言詩「詠懷詩」八十二首があり、また、「大人先生傳」という一文がある。「大人先生傳」は、彼の思想の全容と、その形成過程を通観する上で、もつとも重視すべき作品であり、彼の著作の精粹をとり集めて圧縮したかの趣きがあり、彼の思想の集大成と目してよい著作である。

この書に関する先行研究は、平木康平「大人の思想—阮籍の世界」<sup>(1)</sup>、馬場英雄「阮籍「大人先生傳」の諸相」<sup>(2)</sup>、大上正美「「達莊論」と「大人先生伝」<sup>(3)</sup>、福永光司「阮籍における懼れと慰め」<sup>(4)</sup>などがある。

しかしながら、これまでに「大人先生傳」の全訳はみられない。そこで、ここにすべての訳注を施したいと考える。なお、底本としては

『全三國文』巻四十六所収の「大人先生傳」を用いた。<sup>5</sup>本文中に記載された文字の異同は、原文、訓読においてカッコ書きで記した。また、全体像を理解しやすくするために、まずは通釈の全文を紹介し、つぎに原文、訓読を記した。その通釈、原文、訓読を文の段落ごとにそれぞれ番号をふって対照しやすいうようにし、その後「大人先生傳」の解説を記載した。

## 二、全文通釈

大人先生は思うに老人である。その姓名はわからない。天地の始原を述べ、古代の神農や黄帝のことをはつきりと話す。その年齢はわからない。かつて蘇門の山に住まいしていた。故に、世の人々はみなこの人を閑人と呼んでいた。性命を養い寿命を延ばして、自然と同じ時間の流れのなかに生きたので、いにしえの堯舜の時代のことをまるで手に取るように知っていた。万里を一步、千年を一朝ぐらいに思っていた。行くときも、どこかへ行こうとするつもりはない。住むときも、どこかに住もうとするつもりはない。大いなる道を求めて一か所に身を置かない。先生は自然の変化に順応して、天地をわが家としている。運氣が去り、時勢が衰えても、意に介することなく毅然としてひとり立ちしていた。みずからの心は十分満足し、自然の変化とともに推移

していた。だから沈黙をまもり、自然の道とその働きを探って、世間とは同調しなかった。自分の考えを好む者は先生を非難し、見識のない者はいぶかり、先生の変化の奥深さがわからなかった。しかし先生は、世間が非難し、いぶかしがるからといって、自分の生き方を変えようとはしなかった。先生が思うには、中土が天下に占める大きさは、まったく蠅や蚊がかやの中にくっ付いている大きさにも及ばない。だから世間のことを大事とは思わず、異国の珍しい地域に心を馳せた。遊覧して楽しんだところは、世の人のまだ見ぬところであった。その旅はあちこち徘徊して行き果てることはなかった。先生はみずから書いた書を蘇門の山のこして去り、天下の人びとは先生がどこへ行っただかは知らない。①

あるひとが大人先生に書を送っている。天下の尊貴のなかで、君子より尊貴な者はいない。君子の服には定常の色があり、容貌には定常の規則があり、行動には定常の形式がある。立つときは、腰を九の字に折り曲げて拝礼をし、両手を胸の前で重ねて太鼓を抱いているように敬礼する。動静には礼節があり、歩む足どりは音律にかなったようにリズムカルであり、立ちい振舞いは流れるようで、みな規矩にかなっている。心は氷をいだくように慎重であり、戦々恐々として、身を律して行いを修めている。いつも一日一日を慎んで過ごし、地は吉方を選んで行き、ひたすら落ち度はないかと恐れている。周公や孔子

の遺訓を復唱し、堯舜の時代の道徳に感嘆して、ひたすら法を修得し、ひたすら礼を順守している。手には珪璧の玉器をとり、足は墨繩の上を踏むかのように振る舞う。行動するときは目前の手本となるようにし、もの言うときは永久の規範となることをねがっている。若いころは郷里でその名がたたえられ、成人してからは国中にその名がとどろき、うまく行けば三公の高位に就こうとし、下手をしても地方長官ぐらいにはなる。だから金玉を身につけ、綾なす組ひもをたらし、尊位を授かり、領地を得て、名を後世にとどろかし、功績と徳行は昔の人と肩をならべる。君王に仕えて民を治め、やがて引退してわが家を治め、妻子を養い育てる。地を卜して吉宅を建て、わざわざいを遠ざけて福を招き、末永く家が安定するよう心を配る。これはまことに士君子の高い境地であり、昔より今日にいたるまで変わらぬ立派な行いである。いま先生とはいえば、ざんばら髪で大海のなかにおり、君子とはほど遠いところにおられる。私は世間の人々が先生を歎き、非難することを心配している。その行いは世間に笑われ、その身が出世する術もないのは、恥辱というほかはない。その身は困苦の地に置き、その行いは世俗の人に笑われている。わたしは先生のためにも支持することはできない。②

そこで、大人先生はやおらゆつたりとして歎いた。雲や虹に身をよせて、これに答えていう。そなたがいう高尚とやらは、通らぬ話だ。

そもそも大人は、造物主と一体であり、天地とならび生きている。浮世に逍遙し、道とともに生成し、変化集散して、その姿は一定ではない。天地はわたしの内側に場所を占めており、宇宙はわたしの外側に遠く開かれている。わが天地の永遠堅固なことは、世俗の人間の及ぶところではない。私はいまそなたのために次のことを話して聞かそう。③

(堅固なはずの天地ですら) いにしえ、天はかつて下にあり、地はかつて上にあった。天地は反転をくりかえしており、安定し固定したのではない。どうして法則性を失わず、これを一定させることができようか。天はめぐり、地は動く。山々は陥没し、河川は隆起する。雲散してバラバラになり、宇宙は理法を失う。それなのに、そなたはまた、どうして地を選んで行き、(五音の) 商羽にあわせてリズムミカルに歩むことができようか。いにしえ、もろもろの気が生存を争い、万物は思慮を失い、手足が意のままに動かず、その身は泥土となつてしまった。根は抜かれ、枝は分断され、皆その居場所を失った。それなのに、そなたはまた、どうして身をひきしめ、行いをおさめ、腰を折り手を前に組んで礼儀をただすことができようか。④

たとえば、李牧は戦功をあげたが、その身は殺された。伯宗は君主に忠義をつくしたが、家は断絶した。(李牧は) 進んで利益を追求し、それで身を滅ぼした。(伯宗は) 爵位や褒賞を追及して、家は滅んだ。

それなのに、そなたはまた、どうして萬億の金玉を抱きかかえて、君主に忠実につかえ、妻子を安全に守ることができようか。かつそなたは、あのしらみがふんどしについているのを見たことがないかね。（それはふんどしの）深い縫目に隠れ、綿くずにかくれて、自分では吉宅に住んでいると思っている。行きはするけれども、あえて縫い目を離れない。動きはするけれども、あえてふんどしより出られない。じぶんでは（よい）住いを得たと思っている。飢えると人をかみ、食に困窮することはないと思っている。けれども、燃えさかる炎がひろがり、村が焦土となり、都が減んでしまえば、多くのしらみはふんどしのなかで死んで、そこから出ることはできない。そなたの君子とやらが狭い区域に住んでいるのと、しらみがふんどしの中にいるのと、なんの違いがあるか。悲しいかな。自分では、わざわざを遠ざけ、福を近づけ、堅実で行きづまることがないと思っている。⑤

また、あの太陽に住むカラスが世俗の塵の外に遊ぶのと、ミソサザイがよもぎの中で遊ぶのとをみくらべてみると、もとより大小のスケールが違う。それと同じこと、そなたはまた、何でそんなつまらぬ君子のことをわたしに聞いたりするのか。たとえば、近いところでは夏は股に滅ばされ、周は漢の劉氏に追われた。（股都の）ちゆうと耿やはく薄（毫）は廢墟となり、（周都の）豊や鎬は丘陵となった。至人が来てちよつとふりかえる間に、世の王朝は交替した。その居処が定まらないうち

に、他人がその土地を領有した。いったい誰が久しく領有することができようか。こういうわけで、至人はひとつのところにその身を置かず居り、その身を修めなくても治まっていた。日月の運行を基準とし、陰陽の交替を時期としている。どうして世俗のことを心にかけ、一時のわずらわしさを身にかぶる必要があるか。（至人は）東雲を呼び寄せ、西風に乗ってあまがける。陰の気ときは雌伏し、陽の気ときは雄飛する。志は得られ、欲求は満たされ、これをさまたげる物はない。また、どうして自分が思いを達することができなくて、あの俗人どもに笑われることなどあるものか。⑥

むかし天地が開けて、万物は並び発生した。大きなものはその本性を安定させ、小さなものはその形体をととのえた。陰はその気を収蔵し、陽はその精を発散させた。危害があっても避けることがなく、利益があっても争うことがない。これを放しても失うことがなく、これを取めてもあふれることがない。死んでも若死にとはせず、生きながらえても長寿とはしない。福は得ようとすることはなく、禍はさげようとすることはない。おのおのその天命に従い、節度をもつたがいにその分を守る。賢明な者はその智で勝つことはなく、暗愚な者はその愚で敗れることはない。弱者は迫害されることはなく、強者は圧迫することはない。おもうに君子がなくても庶民は安定し、臣下がいなくても、万事はうまくおさまる。自分の身を保ち、本性をおさめ、そ

の理法をふみはずさない。ただただこのようにすれば、よく長生きできるのである。いまそなたたちは音律をつくり、それでもつて自然の声を乱している。顔色をつくり、それでもつて姿形をゆがめている。外はその容貌をかざつて、内はその心情を隠している。欲望をいだいて多くのものを求め、本心を欺いて名声をもとめている。君子が立つて残虐な行為が勃発し、臣下がおかれて残賊が生じている。礼法を定めて、下々の民を束縛している。愚かな民をあざむき、つたない民をたぶらかす。智慧をたくわえて、自分をえらいと思つている。強い者はにらみつけて、他の者を凌辱する。弱い者は憔悴して、人につかえる。清廉のふりをして貪欲なことをする。内は邪険なのに、外は仁慈のふりをする。罪が問われても、過ちを悔いしない。たまたま運がいいと、自慢をする。そのような生き方を駆使して、世渡りをする。だから物事が沈滞してふるわない。⑦

いったい貴い身分がなければ、賤者は怨むことはない。富がなければ、貧者は争うことはない。それぞれが自分の分に満足し、それ以上に求めることはない。奇妙な音をつくらなければ、耳はものの聴き方を変えることはない。淫らかな色が示されなければ、目はものの見方を改めることはない。耳目が改めかわらなければ、その心をかき乱すことはない。これは先の世の人がたどりついた境地である。今、そなたは賢者

を尊んで高く評価し、才能を競つて有能をたつとび、権勢を争つて勝者を君主とし、尊貴を愛して地位を上げようとしている。天下の人々をかりたてて、そこに趣かせようとしている。これが身分の上下の者がともに傷つけあう原因である。天地万物の限りをつくして、声色の無限の欲望を満たそうとしている。これは人民を養育するやりかたではない。こういうわけで、人民がことの本质に気づくことをおそれるがゆえに、恩賞を重くして人民を喜ばせ、刑罰を嚴格にして人民を威嚇する。しかし国の財はとほしくて、恩賞を供与できない。刑は足りなくなつて、処罰がなされない。そうして、はじめて国を亡ぼし、君主を殺し、滅亡の禍が起こつてくる。これはそなたの君子のせいではないのか。そなたの君子の礼法は、まことに天下に残虐や混乱をひきおこし、危険な死に追い込む術である。ところが、それを自分では永遠に変わらない美徳の道だと思ひ込んでいる。まことに勘違いではないか。⑧

今わたしは天地の外に逍遙し、造物主と交友し、日の昇る湯谷で朝の気を食らい、日の沈む西海で夕の気を飲む。また万物は変化流行するが、わたしはその道の流れに身をゆだねている。これは、万物にたいしてまことに厚いつき合い方ではないか。ゆえに、自然に通じていない者とは、ともに道について語ることはできない。道理に暗い者とは、ともに自然の道に達することはできない。それはそなたのことで

ある。⑨

先生がこのような言葉を述べたところ、天下の奇言を喜ぶ者は、大先生をりつばだといひ、悲憤慷慨する者は、大人先生を高く評価する。しかし、大人先生の本質を知らず、その実情を見ず、その道に通じていないので、的外れな言葉がでてくる。彼らはその真相を知ることがなく、その実情に通じていない。彼らは大人先生をりつばだとしてこれを評価し、これに同調するけれども、大人先生を非難し怪しむ連中は軽蔑する。⑩

至人（至高のレベルに達した者）は、自分が貴いことを知らず、自分が神秘的な働きをもっていることに気づかない。神秘で貴い道は至人の内側に存しており、万物はその外側に運行している。だから、天下が尽き果てても、人々はその働きを知らない。⑪

はるか遠く宋の国の扶搖の野に隠者がいた。彼は大人先生を見て喜び、志を同じくし、行いを同じくする人だと思つた。そしていつた。「よきかな。私は大人先生に出会い、日頃のうつつぶんを晴らしたい。大昔の質朴で純粹で手厚い道はすでに廃れ、枝先にあだ花が咲き残つた。山犬や虎のごとき獠猛な連中が、罪のない人々を虐待した。有害なものも利益があるとし、本性を損ない、身体を滅ぼしている。わたしはそれを見るに忍びない。だから、世俗を去つてここにいるのだ。世俗の人間とは一緒に仲間になることができない。木石と仲間になる方が

ました。安期生は蓬萊山に隠れ、角李は丹水に身を潜めた。隠者の鮑焦は立つたまま樹が枯れるように死に、萊維は世俗から去つてはるか遠くで死んだ。それもこれと同じ考えからだ。わたしは志を高く持ち、高尚さを顯示して、ここで自分の人生を終えようと思つている。鳥のように生まれ、獣のように死んでいくのだ。自分の肉体を埋め、骨を残して、もとの暮らしに戻ろうとは思わない。いったい志を同じくするものは互いに相手を求め、好みの合う者は仲間になるものだ。先生は私と同じ考えであろう」。⑫

かくして、大人先生は虹をひろげ、塵を撒きひろげた。雪のような白い蓋を傾け、日の光をおおつた。玉のひさしによりかかり、空に飛びあがり、もろもろの手綱をまとめ、静かに馬車を進めた。ふりかえつて、隠者にこういつた。「大昔、真人は天の根源であつた。気を合わせ、志を一点に集中した。万物はそれによつて存続した。退いても後ろをみず、進んでも先をみない。西北を開いて住まいをつくり、東南を開いて門をつくつた。奥深い道を会得して、その徳でもつて長く楽しんでた。天地にまたがつて、尊いところに身をおいた。このようにして、自分の本質を形づくつた。こうして、いかなるものをも避けることなく身を処したので、目にする所はすべて安らかだつた。どんな物もわずらわしく思わなかつたので、おもむくところはすべて成就した。逍遙して、その思いを十分にのぼし、飛翔して、その心を十分にとき



放った。もとより至人には自分の居宅はなく、天地を客人とみなしている。主人という意識がなく、天地を自分の居場所としている。自分の仕事がなく、天地の仕事をわがごとくしている。是非の分別がなく、善悪の差異もない。ゆえに、天下は至人の恩沢を受けて、万物は盛んとなるわけだ。(ところがあの君子のように)相手を憎んで自分を好み、自分を肯定して相手を否定し、激しく怒って争って何かを求め、ころざしを貴んで身を卑しめている。鳥のように生きて、獣のように死んでいく。なお何を顕示して榮譽を得ようとしているのか。悲しいことよ。そなたの心の用いようは、安らかな生活を軽んじて、生命を忘れ、(高尚だという)名譽を追求して、身体をほろぼしている。まことにそなたは世間のひとと違わない。なんで瘦せ衰えてじわじわと死んでいくのかね。そなたの好むところは、まるで話にならない。わたしはもうそなたとはお別れだ」<sup>⑬</sup>

そこで先生は眉をあげて視線を流し、袖を振って裳裾をさばき、手綱をゆるめ、むちを入れた。かくして風のように飛び上がり、雲のようにあまがけた。あの隠者は涙を流し、自分の志をいたましく思わないかと、恐れたのであった。<sup>⑭</sup>

先生は神宮に立ち寄って休息し、呉泉で口をすすいで立ち去った。ゆつたりとあちらこちらをへめぐって遊覧した。すると丘でたきぎを

伐る者を見かけ、溜息をついていった。「そなたは何でこんなところで一生を終えようとしているのかね」。たきぎを伐る者はいった。「こうして一生を終えるのか、こうして一生を終えないのか、わからない。聖人は胸中に何の思いもない。なにそれ、哀れむことなどあるう。この世は盛衰変化するもので、いつも同じ状態ではない。才能を自分の身の内に秘め、じっとして時節の到来を待っているのだ。むかし、孫臧は(龐涓によって)足斬りにされたが、逆に(龐涓を)つかまえて殺した。范雎は脇腹をへし折られたが、のちに出世した。百里奚は若い頃は貧しかったが、秦の宰相に昇りつめた。姜子牙は年老いてから周を輔佐した。このように、人生はひっくりかえったかと思えば、また起き上がるものだ。これらは、先に困窮して、後に成果を取めた例だ。秦は六国を破り、その地を兼併し、諸侯を殲滅し、南面して皇帝と称した。盛んに色彩をほどこし、壮大な宮殿をつくり、南山に穴をあけて闕門とし、東海に標識を立てて闕門とした。多くの宮室に門を構えて絶えることがなく、永遠に存続することを願った。宮殿を美しく飾り、旗やのぼりを盛んにたて、鐘鼓をうち鳴らして、そのりっぱさを称揚した。園地を広くして池沼を深くし、渭河の北側を開発して、咸陽に都を建てた。しかし、美しい木々が生育する前に、荒れ果てていばらが阿房宮にむらがり生えてしまった。時は代わる代わる変化して、場は代わる代わる変化する。だから先に得ても後には失う。山東

の捕虜が崛起して、天下の王となった。このような例を見れば、行きづまるか、出世するかは、知れたものではない。かつ聖人は道徳に心がけたり、富貴をこころざしたりはしない。聖人は無為をもってみずからの働きとし、人事を大事にしない。尊貴も重視しないが、貧賤も軽視しない。何かを失っても屈辱とも思わない。何かを得ても榮譽だとも思わない。木の根が伸びて枝が伸び、葉が繁茂しても、やがて花は落ちてしまう。無限の死も一瞬の生もさして区別はない。寿命の多少など気にして、またどうしてあくせくする必要があろうか」⑮

そこで、ためいきをついて歌っている。「日は不周の山の西に没し、月は丹淵のうちより出ず。陽の光が隠れて見えなくなると、月の光が代わって輝く。月がこうこうと輝いているのはつかの間、やがて月の光は衰えてまた東に進む。雲や霧については離れ、行き来するさまは疾風のごとし。富貴の身になってもほんの一瞬のこと、貧賤の身もそのまま終わるわけでもなからう。張良は逃亡する立場から身をおこし、その武威は夷狄にまでとどろいた。召平は秦の東陵に封ぜられたが、一朝にして庶民に身をおとした。枝葉は根に命運を託すように、人の死生は木の盛衰と同じことだ。志を得て出世したかと思うと、勢いを失って時がたつと没落してしまう。寒暑はかわるがわるおとずれ、ものごとの変化はくりかえす。禍福はいつも一定してはいない。何でわが身がよるすべがないと憂える必要があろうか。こうして見て

くると、たきぎを負う身であつても、どうして悲しむことがあるか」⑯

先生これを聞いて笑っていった。「大には及ばないが、なんとかかをまぬがれてはいるね」。そこで、歌っている。「天地は解き放たれ、六合は開き放たれた。星辰も眼下に落ち、日月も眼下に落ちて行く。わたしは大空にとびあがって、さてどこを目指すことやら。衣は重ねずともわが服は美しく、佩玉は飾らずともわが腰は美しい。大空を上下へと徘徊すれば、だれがわが本性を知ろうか」⑰

かくて飛び去り、はるかなる大空に浮かび、雲の乗り物をほしいままにあやつり、雲のかさをたてて蔽う。あてもなくとびまわり、宇宙のかなたを旋回す。彗星をおし建てて旗にみため、雷鳴をガンガンとうちならす。不周の山を押し開いて車を進め、九野の夷泰に出る。中洲に腰をおろしてちよつとふりかえり、崇山を見やうて遙か遠くへと進む。わが旗をおし立てて旋回し、心を宇宙のかなたに解き放つ。前をひくものを抑えず、暗い宇宙を駆け抜けてゆく。世の中のさまざまな雑務を捨て去って、細々としたことなどに構っておれようか。身体をからにして軽くし、精はこまやかにして神は豊かである。(古代の弓矢の名人とされた) 夷羿に命じて日の光を和らげ、析來をよびよせて風を穏やかにさせる。扶桑の高い枝の上に登り、扶搖のそびえたつ木の上に登る。つむじ風が渦まわく暗闇のなかを飛び上がり、明るく輝

く光の中でわが身を洗う。着ていた衣裳を脱ぎ捨てて、雲氣を身にま  
とって進んでいく。朝には湯谷に車駕を休ませ、夕べには長泉に馬を  
息させる。時には一息入れて気分を変え、若い花をかざして、暗闇を  
照らす。朱陽を左におき旗を建て、玄陰を右におき旗を建てさせる。  
見づくりいをして方向をかえ、躍り上がって向きをうかがい、遠くへ  
と進んでゆく。<sup>⑱</sup>

陰陽はかわるがわる交代し、四季は駆け足で過ぎ去ってゆく。ただ  
仙人に姿を変えるのはほんのつかの間、久しくそこに留まることを願  
わない。驚かす風が吹くと楽しみを忘れるが、雲がわき起ると憂いを  
忘れる。突然の稲妻が消えさると心はなごみ、ひろびろとした宇宙を  
巡りはるか遠くにゆく。日月を腰にぶらさげて光を照らし、逍遙して  
上へ上へと登り浮かぶ。前を押し広げて進み行き、これから進路を虚  
州にむけよう。紫微宮を掃き清めて席を広げ、帝室に坐ってさっそく  
酒を酌み交す。多くの楽器を集めて音楽を奏でると、その声がはるか  
遠くまで鳴り響く。五帝が舞いを舞うと、いま一度と所望し、六神が  
次々に歌い継ぐ。ひゅうひゅう肅々とした音色は、心の奥底に沁みわ  
たつてゆく。遙かかなたまで気分は果てしなく伸び広がり、心は行つ  
たきり帰るのも忘れてしまう。胸中はひろびろと大きいが、志はきつ  
ちりと揺るがない。(ここにも長居はせずに立ち去り) 大人の姿は小  
さく見えなくなつて、もうここにはかえつてこない。雲氣に乗りさら

に上へと登つてゆく。大幽の玉女を召し寄せ、上天の美人と接見する。  
ゆつたりのびのびとした雲氣を身に帯び、大清の淑女の真心を身に受  
ける。欲びの情を寄せ合い、ひそかに情を授ける。あふれんばかりの  
色香を前面に押し出すさまはまるで神のようだ。華やかな姿はかがや  
いて、ともに色氣を発散し、つやかな容色はあでやかで、その美を  
競いあつている。黒髪が傾いてびんが垂れ、紅顔をかがやかしてお色  
直しをする。時の立つのも忘れていたが、いざここを立ち去ろうとす  
ると、風がさつと吹いて衣をなびかせた。雲氣は消えて霧もはれ、も  
やもさつと晴れ、すっかりどこかへ消えてしまった。心はほんやりと  
してはるか彼方に思いをはせ、遠くに目をやるが、はっきりとは見え  
ない。清風をふきあげて旗をはためかせ、せんぐん旋軫(星宿)を脇添えとし  
て方向を転ずる。炎陽(太陽)を燃え盛らせて境界を出て、(火の神  
の)祝融に命じて遣わしめ、(水の神の)玄冥を先駆けさせて堅固な  
守りとし、(金の神の)蓐收に戈をとつてつゆはらいをさせる。(木の  
神の)句芒にこしきを守らせてすばやく浮かぶ。朝霞が果てしなく広  
がるなか、都を目指してすすんで行くが、はるかに見渡しても仲間  
はおらず、ただひとり立ちつくす。玉の庇に身を寄せて、下界にふと目  
をやつて、そこに苦しんでいる者たちを憐れに思う。是非善悪を区別  
して行いすましているが、またなんとも彼らとは仲間として付き合  
はできない。それを見捨てて、美しい虹の旗をひるがえし、雲の旗を

たなびかせ、さらに遊ぼうと思つて、天空の外にうち出してゆく。⑱

大人先生はざんばら髪で頬ひげをさかだてて、縫い目のない方形の衣をまとい、絨陽ふろうちの帯を巻いた。靈芝を口にくぐみ、甘い華をかみ、空に浮かぶ霧を吸い、空の霞を食べた。朝雲に乗り、春風にまいあがり、太極の東に飛び立ち、崑崙山の西に遊んだ。手綱を忘れ、むちを落とす、堯舜の都に視線をむけた。ほんやりとして物思いにふけり、ぐったりとしてものを忘れた。⑳

(大人先生は) 慨嘆して吐息をもらしていった。「ああ、一時は一年に及ばない。一年は天の時に及ばない。天の時は道の時に及ばない。道の時は神の時に及ばない。神とは自然の根源である。あの物事にこだわっている者は、自分たちの世界を貴いと思つている。だから自分たちの世界が、この広大な世界より卑しいことなど知る由もない。それだから世の人と交わつて貴を争うが、そんな貴は尊ぶに足りない。世の人と交わつて富を争うが、そんな富は重んずるに足りない。かならず世俗を超越し、群衆を超越し、世俗を忘れてひとり行かん。太古の前にさかのぼり、広漠とした原初をみる。心は無限の可なかに周流し、志はひろびろと広がり解き放たれる。四季をめぐるただよい、ひるがえつて八方の隅々まで飛翔する。心のおもむくままに振る舞い心を空しくし、心を清らかに保つて、何ものにも拘束されることのないように心がける。些細な行いもそれをけなすほどのこともな

く、聖賢の行いも誉めるほどのこともない。世界は絶えず変化し移りかわるが、神明の働きによりそつていく。無限の空間を広げて、それを自分の居宅とし、宇宙をぐるつと取り巻いて、それを自分の家とする。世界をささえる八本の綱を強くして安定させ、物を制御する自然の力を身につけて、末永く暮らしてゆく。いったいこういう生き方こそが、ほんとうの富貴といふべきである。だから、いにしえの堯舜と徳を競い合うこともない。殷の湯王や周の武王の功績と肩をならべようとすることもない。王許とは仲間となるほどでもなく、陽丘とは並んで遊ぶほどのこともない。天地ですら大人先生の寿命を超えることができない。まして廣成子とは、その容貌を比べるほどのこともない。八風を激しく吹かせて声を揚げ、太初の形跡を踏んでゆく。九天をひらいて解除し、雲を招きよせて飛龍を御す。上へ下へとわけ隔てなく自在に制御し、いにしえと今をわけて、そのどちらかにつくわけでもない。いったい世間の名利は、心を煩わすほどのこともない。だから斉の国を手でぶらさげて楚の国を踏み、趙の国をひっさげて秦の国を踏む。朝が終わらぬうちに、天下に人はいなくなり、東西南北に隣に住む人はいなくなる。悲しいことではないか。そなたが自分を飾ることは。わたしからみると、そんなことでは、どうして長続きできようか。㉑

ここにおいて、先生はここを去り、くらい荒野に身を紛らせ、深い

大洋をたどり、溢れる水流に身をまかせ、重なる淵をつぎつぎと渡つた。さらに青天にまたがり、かえりみて遙か遠くを眺めた。かくして逍遙して年を延ばすことはあつても、かりそめに気を合わせて生き、やがて散り果てるようなことはない。しかしやがて身が分離して拡散すると、水が果てなくなみなみと広がっているかのようになる。つむじ風がわきおこり雲が浮かぶなか、ゆらめく光のさすところに達した。まっすぐに太初のかなかを駆けぬけ、無為の宮殿で休息した。太初とはどんなところか。そこは、後ろもなく、前もなく、その果てをきわめることもできず、誰もその根源を知ることとはできない。太初は遙かかなたまで綿綿と続き、さらに反転するのであろうか。そこには大いなる自然の道が存在しているが、その極致に達することはできない。誰もその根源を悟ることができない。九霊の館を開いて探し求め、まったく自分の理解の足しにもならない。広大な天に登つてあたりを見わたし、太始の和やかな風を浴びる。ひるがえり、逍遙して遠くをめぐる。際限なく続く大路をたどり、太乙星を見すてて方位をさぐらず、天地を越えてまっすぐ進み、煙霧をくぐり抜けて遠くに足をのばす。左は暗く鬱蒼として果てしなく、右はほの暗くゆつたりと限りなく開けている。上は遙か遠くの音を聴こうとしたが何も聞こえず、下は遠くを看ようとしたが何も見えない。なすすべもなく心を休ませた。大空に永くとどまり、思いのままにはばたく。やがてけわし

くそびえる高山には黒い雲が湧きおこり、北風は横なぐりに激しくふき、白雪がまい散る。積もった氷雪が丘のように積み上がり、寒く人の心をやぶる。陰陽は位を失つて、日月はくずれ落ちる。地はさけて石もさけ、林の木々もうちくだかれる。たいそう冷えて陽は消え、寒さが人の心をやぶる。陽気は微弱で陰気が極まると、海水は凍つて流れず、綿は凍つて折れてしまふ。呼吸することができなくなり、寒さで皮膚が裂けてくる。気はあわさつて、かわるがわる変動するさまは、まこと不思議だ。寒さが先導したかと思うと暑さがつき従つて、人を傷つける。こんな時にも心楽しむ、真人は大清を思い慕う。<sup>22</sup> 精神を統一して、こころを平静に保っている。寒暑もその身をやぶらないのは驚くばかりである。憂いや患いは生じないし、ふだん通り安らかな気持ちでいられる。霧が立ち込めて天を覆つても、迷わず自由自在に歩いて行ける。通りが暗くて見えなくなつても、道に迷うことはない。好み樂しむところは世間の人とは違うので、何も争うことはない。俗人はみな死に絶えようとしているが、わたしは独りだけ生きのびている。さて、真人は遊んで、八龍に車をひかせ、日月を照らし、雲の旗を立て、あちこちを徘徊し、どこに行つても楽しんでる。真人が遊ぶと、太階は段差がなくなり、原野はひらけ、天門はとびらを開く。雨がざあざあ降り、風がびゅうびゅうと吹く中、黄山に登り、いただきに出て静かに住みなす。<sup>23</sup>

見たせば、長江や黄河の水は清く、洛陽は埃もたらず、雲も消えて澄みわたっている。するとそこに、真人がやって来た。真人がやって来てくれると、まことに楽しいことよ。ところが、時に世の中が移り変わり、楽しいことがなくなると、真人は去ってゆき、天をめぐって未央宮に帰ってしまった。そこで、わたしは寿命を延ばし、ひとり遊ぶことにした。世間の人はわたしが帰るのを待ち望んでいるが、いつ帰るかわからない。ゆっくり歩いてゆくと、日に日に道は遠ざかる。<sup>24</sup>

先生はこの地を立ち去ってから、天下の人びとは先生がどこで一生を終えたのか誰も知らない。おそらくこの天地を超えて宇宙に遊んでいるのであろう。その遊びはいつ始まり、いつ終わるのか、誰もわからない。自然に生きた真の至人である。ははつ鳥は済水や洛水、汶水をこえて飛ぶことはないが、世間の人間もこれと同じことで、まるで中土の地理にも通じていない。まして四海のかなた、天地の外のことなど知る由もない。先生のような人は、天地を小さな卵ぐらいにしか思っていない。もし、つまらない小人が、先生の長所短所をあげつらい、その是非を議論するならば、まことに哀しいことではないか。<sup>25</sup>

### 三、原文と訓読

(原文)

大人先生蓋老人也。不知姓字。陳天地之始、言神農、黃帝之事昭然也。莫知其生年之數。嘗居蘇門之山。故世咸謂之間(閑)。養性延壽、與自然齊光、其視堯舜之所事、若手中耳。以萬里為一步、以千歲為一朝。行不赴、而居不處、求乎大道而無所寓。先生以應變順和、天地為家。運去勢隕、魁然獨存。自以為、能足與造化推移。故默探道德、不與世同之。自好者非之、無識者怪之、不知其變化神微也。而先生不以世之非怪、而易其務也。先生以為、中區之在天下、曾不若蠅蚊之著帷。故終不以為事。而極意乎異方奇域。遊覽觀樂、非世所見。徘徊無所終極。遺其書于蘇門之山而去。天下莫知其所如往也。<sup>①</sup>

或遺大人先生書曰、天下之貴、莫貴于君子。服有常色、貌有常則、言有常度、行有常式。立則磬折、拱若(一作「則」)抱鼓。動靜有節、趨步商羽、進退周旋、咸有規矩。心若懷冰、戰戰慄慄、束身修行。日慎一日、擇地而行、唯恐遺失。誦周孔之遺訓、歎唐虞之道德、唯法是修、唯禮是克。手執珪璧、足履繩墨、行欲為目前檢、言欲為無窮則。少稱鄉閭、長聞邦國、上欲圖三公、下不失九州牧。故挾金玉、垂文組、享尊位、取茅土、揚聲名于後世、齊功德于往古。奉事君王、牧養百姓、退營私家、育長妻子。卜吉宅、慮乃億祉、遠禍近福、永堅固已。此誠

士君子之高致，古今不易之美行也。今，先生乃被髮而居巨海之中，與若君子者遠。吾恐世之歎（或作「笑」）先生而非之也。行為世所笑，身無由自達，則可謂恥辱矣。身處困苦之地，而行為世俗之所笑。吾為先生不取也。②

于是，大人先生乃迥然而歎（一作笑）。假雲霓而應之曰，若之云尚，何通哉。夫大人者，乃與造物同體，天地竝生。逍遙浮世，與道俱成。變化散聚，不常其形。天地制域于內，而浮明開達于外。天地之永固，非世俗之所及也。吾將，為汝言之。③

往者，天嘗在下，地嘗在上。反覆顛倒，未之安固。焉得不失度式，而常之。天因，地動，山陷，川起。雲散震壞，六合失理。汝又，焉得擇地而行，趨步商羽。往者，群氣爭存，萬物死慮，支體不從，身為泥土。根拔，枝殊，咸失其所。汝又，焉得束身，修行，磬折抱鼓。④

李牧功而身死。伯宗忠而世絕。進求利以喪身。營爵賞而家滅。汝又，焉得挾金玉萬億，祇奉君上而全妻子乎。且汝，獨不見夫虱之處于糞之中乎。（隱乎）深縫，匿乎壞絮，自以為吉宅也。行不敢離縫際。動不敢出襠襠。自以為得繩墨也。飢則嚙人，自以為無窮食也。然，炎斤（听）火流，焦邑，滅都，群虱死于糞中，而不能出。汝君子之處區之內，亦何異夫虱之處糞中乎。悲夫。而乃自以為，遠禍，近福，堅無窮也。⑤

亦觀夫陽鳥遊于塵外，而鷓鴣戲于蓬艾，小大固不相及。汝又，何以為若君子聞于余乎。且近者夏喪于商，周播之劉。耿薄為墟，豐鎬成丘。

至人來一顧，而世代相酬。厥居未定，他人也（一作「已」）有汝之茅土。將誰與久。是以主（至）人不處而居，不修而治。日月為正，陰陽為期。豈希情乎世，繫累于一時。來東雲，駕西風。與陰守雌，據陽為雄。志得欲從，物莫之窮。又何不能自達，而畏夫世笑哉。⑥

昔者天地開闢，萬物竝生。大者恬其性，細者靜其形。陰藏其氣，陽發其精。害無所避，利無所爭。放之不失，收之不盈。亡不為天，存不為壽。福無所得，禍無所咎。各從其命，以度相守。明者不以智勝，闇者不以愚敗。弱者不以迫畏，強者不以力盡。蓋無君而庶物定，無臣而萬事理。保身修性，不違其紀。惟茲若然。故能長久。今，汝造音以亂聲，作色以詭形。外易其貌，內隱其情。懷欲以求多，詐偽以要名。君立而虐興，臣設而賊生。坐制禮法，束縛下民。欺愚，誑拙。藏智，自神。強者睨睨而凌暴，弱者憔悴而事人。假廉而成貪，內險而外仁。罪至不悔過。幸遇則自矜。馳此以奏除。故循（一作「滔」）滯而不振。⑦

夫無貴，則賤者不怨。無富，則貧者不爭。各足于身而無所求也。恩澤無所歸，則死敗無所仇。奇聲不作，則耳不易聽。淫色不顯，則目不改視。耳目不相易改，則無以亂其神矣。此先世之所至止也。今，汝尊賢以相高，競能以相尚。爭勢以相君，寵貴以相加。驅天下以趣之。此所以上下相殘也。竭天地萬物之至，以奉聲色無窮之欲。此非所以養百姓也。于是，懼民之知其然。故重賞以喜之，嚴刑以威之。財置而賞不供，刑盡而罰不行。乃始有亡國，戮君，潰散之禍。此非汝君子之為乎。

汝君子之禮法，誠天下殘賊、亂危、死亡之術耳。而乃自以為美行，不易之道。不亦過乎。⑧

今吾乃飄飄于天地之外，與造化為友，朝飡湯谷夕飲西海。將變化遷易，與道周始。此之，于萬物豈不厚哉。故不通于自然者，不足以言道。

闕于昭昭者，不足與達明。子之謂也。⑨

先生既申若言，天下之喜奇者異之，忼愾者高之。其不知其體，不見其情。猜耳其道，虛偽之名。莫識其真，弗達其情。雖異而高之，與嚮之，非怪者蔑如也。⑩

至人者，不知乃貴，不見乃神。神貴之道存乎內，而萬物運于外矣。故天下終、而不知其用也。⑪

迥乎有宗（或作「宋」）扶淫之野有隱士焉。見之而喜。自以為，均志同行也。曰，善哉。吾得之見而舒憤也。上占質樸，淳厚之道已廢，而末枝遺華竝興。豺虎貪虐群物無辜，以害為利，殞性、亡軀。吾不忍見也。故，去而處茲。人不可與為儔。不若與木石為鄰。安期逃乎蓬山，角李潛乎丹水（一作「山」）。鮑焦立以枯槁，萊維去而遁死。亦由茲。夫吾將抗志，顯高，遂終于斯。禽生而獸死，埋形而遺骨。不復反余之生乎。夫志均者相求，好合者齊與夫子同之。⑫

于是，先生乃舒虹霓，以蕃塵。傾雪蓋，以蔽明。倚瑤廂而徘徊，總眾轡，而安行。顧而謂之曰，太初真人惟天之根。專氣，一志，萬物以存。退不見後，進不覲先。發西北而造制，啟東南以為門。微道，而以

德久娛樂。跨天地而處尊。夫然成吾體也。是以，不避物而處，所觀則寧。不以物為累，所適則成。徜徉，足以舒其意。浮騰，足以逞其情。故至人無宅，天地為客。至人無主，天地為所。至人無事，天地為故。無是非之別，無善惡之異。故天下被其澤，而萬物所以熾也。若夫惡彼而好我，自是而非人，忿激以爭求，貴志而賤身。伊禽生，而獸死。尚何顯而獲榮。悲夫，子之用心也。薄安利，以忘生。要求名，以喪體。誠與彼其無詭。何枯槁，而遁死。子之所好，何足言哉。吾將去子矣。⑬

乃揚眉而湯目，振袖而撫裳，令緩轡而縱策。遂風起而雲翔。彼人者，瞻之而垂泣，自痛其志。衣草木之皮，伏于巖石之下，懼不終夕而死。⑭

先生，過神宮而息，漱吳泉而行。迴乎迥而遊覽焉。見薪于阜者歎曰，汝將焉以是終乎哉。薪者曰，是終我乎。不以是終我乎。且聖人無懷。何其哀。夫盛衰變化，常不于茲。藏器于身，伏以俟時。孫別足以擒龐。雖折脇而乃休。百里困而相羸。牙既老而彌周。既顛倒，而更來兮。固先窮，而後收。秦破六國，并兼其地，夷滅諸侯。南面稱帝，媵盛色，崇靡麗。鑿南山以為闕，表東海以為門。門萬室而不絕，圖無窮而永存。美宮室而盛帷幃，擊鍾鼓而揚其章。廣苑囿而深池沼，興渭北而建咸陽。蠟木曾未及成林，而荆棘已叢乎阿房。時代存，而迭處。故先得，而後亡。山東之徒（徒，虜）虜，遂起而王天下。由此視之，窮達詎可知邪。且聖人以道德為心，不以富貴為志。以無為用，不以人物為事。尊顯不加重，貧賤不自輕。失不自以為辱，得不自以為榮。木根挺而枝



遠，葉繁茂而華零。無窮之死猶一朝之生。身之多少，又何足營。⑮

因歎而歌曰：日沒不周西，月出丹淵中。陽精蔽不見，陰光代為雄。

亭亭在須臾，厭厭將復東。離合雲霧兮，往來如飄風。富貴俛仰間，貧賤何必終。留侯起亡虜，威武赫夷荒。召平封東陵，一旦為布衣。枝葉托根柢，死生同盛衰。得志從命升，失勢與時隕。寒暑代征邁，變化更相推。禍福無常主，何憂身無歸。推茲由斯，負薪又何哀。⑯

先生聞之，笑曰：雖不及大，庶免小矣。乃歌曰：天地解兮，六合開。星辰實兮，日月隕。我騰而上。將何懷。衣弗襲而服美，佩弗飾而自章。上下徘徊兮，誰識吾常。⑰

遂去而遐浮，肆雲羣，興氣蓋。徜徉回翔兮，濛濛之外。建長星以為旗兮，擊雷霆之礮。開不周，而出車兮，出（一作「步」）九野之夷泰。坐中州而一顧兮，望崇山而廻邁。端余節而飛旃兮，縱心慮乎荒裔。擇或作「釋」。前者而弗修兮，馳蒙闇而遠邁。棄世務之眾為兮，何細事之足賴。虛形體而輕舉兮，精微妙而神豐。命夷羽使寬日兮，召忻來使緩風。攀扶桑之長枝兮，登扶搖之隆崇。躍潛飄之冥味兮，洗光曜之昭明。遺衣裳而弗服兮，服雲氣而遂行。朝造駕乎湯谷兮，夕息馬乎長泉。時崦嵫而易氣兮，輝若華以照冥。左朱陽以舉麾兮，右玄陰以建旗。變容飾而改度，遂騰竊以修征。⑱

陰陽更而代邁，四時奔而相迫。惟仙化之倏忽兮，心不樂乎久留。驚風奮而遺樂兮，雖雲起，而忘憂。忽電消而神迫兮，歷寥廓而遐邁。佩

日月以舒光兮，登徜徉而上浮。歷前進于彼迫兮，將步足乎虛州。掃紫宮而陳席兮，坐帝室而忽會酬。萃眾音而奏樂兮，聲驚渺而悠悠。五帝舞而再屬兮，六神歌而代周。樂啾啾肅肅，洞心達神。超遙茫茫，心往而忘反。慮大而志矜局（或作「粵」）。大人微而弗復兮，揚雲氣而上陳。召大幽之玉女兮，接上王之美人。體雲氣之迫暢兮，服太清之淑真。合歡情而微授兮，先豔溢其若神。華姿燁以俱發兮，采色煥其竝振。傾玄鬢而垂鬢兮，曜紅顏而自新。時曖曖而將逝兮，風飄飄而振衣。雲氣解而霧離兮，靄奔散而永歸。心惆悵而遙思兮，眇廻目而弗晞。揚清風以為旗兮，翼旋軫而反行。騰炎陽而出疆兮，命祝融而使遣。驅玄冥以攝堅兮，蓐收秉而先戈。句芒奉轂浮驚，朝霞寥廓茫茫而靡都兮，邈無儔而獨立。倚瑤廂而一顧兮，哀下土之憔悴。分是非以為行兮，又何足與比類。霓旌飄兮雲旗靄，樂遊兮出天外。⑲

大人先生被髮飛鬢，衣方離之衣，繞絨陽之帶。含奇芝，嚼甘華，噏浮霧，餐霄霞。興朝雲，颺春風，奮乎太極之東，遊乎昆侖之西。遺轡、隕策，流盼乎唐虞之都。惘然而思，悵爾若忘。⑳

慨然而歎曰：嗚呼，時不若歲，歲不若天。天不若道，道不若神。神者自然之根也。彼句句者，自以為貴夫世矣。而惡知夫世之賤乎茲哉。故與世爭貴，貴不足尊。與世爭富，富不足先。必超世而絕群，遺俗而獨往。登乎太姑之前，覽乎忽漠之初。慮周流于無外，志浩蕩而遂舒。飄飄於四運，翻翱翔乎八隅。欲從肆而彷彿，澆濼而靡拘。細行不足以

為毀、聖賢不足以為譽。變化移易、與神明扶。廓無外以為宅、周宇宙以為廬。強八維而處安、據制物以永居。夫如是、則可謂富貴矣。是故不與堯舜齊德、不與湯武竝功。王許不足以為匹、陽丘豈能與比縱。天地且不能越其壽。廣成子曾何足與竝容。激八風以揚聲、躡元吉之高蹤。被九天以開除兮、來雲氣以馭飛龍。專上下以制統兮、殊古今而靡同。夫世之名利、胡足以累之哉。故提齊而蹶楚、挈趙而蹈秦。不滿一朝而天下無人、東西南北莫之與鄰。悲夫、子之修飾、以余觀之、將焉存乎。

⑲ 於茲、先生乃去之、紛泱莽、軌沕洋。汜衍溢、歷度重淵。跨青天、顧而追覽焉。則有逍遙以永年。無存忽合散而下。臻分離蕩、漾漾洋洋。飄涌（一作「踊」）、雲浮、達於搖光。直馳驚乎太初之中、而休息乎無為之宮。太初何如。無後、無先。莫究其極。誰識其根。邈渺綿綿、乃反復乎。大道之所存、莫暘其究。誰曉其根。辟九靈而求索、曾何足以自降。登其萬天而通觀、浴大始之和風。測逍遙以遠追。遵大路之無窮、遺太乙而弗使、陵天地而徑行。超濛鴻而遠迹。左蕩莽而無涯、右幽悠而無方。上遙聽而無聲、下修視而無章。施無有而宅神、永太清乎敖翔。崔巍高山勃玄雲、朔風橫厲白雪紛。積冰若陵、寒傷人。陰陽失位日月墮。地坼石裂、林木摧。大冷陽凝、寒傷懷。陽和微弱陰陰竭。海凍不流、綿絮折。呼噓不通、寒傷裂。氣并代動、變如神。寒倡熱隨、害傷人。熙、與真人懷太清。⑳

精神專一、用意平。寒暑勿傷、莫不驚。憂患靡由、素氣寧。浮游凌天、恣所經。往來微妙、路無傾。好樂非世、又何爭。人且皆死、我獨生。真人遊、駕八龍、曜日月、載雲旗、徘徊追、樂所之。真人遊、太階夷。□原辟、天門開。雨濛濛、風颼颼。登黃山、出栖遲。㉑

江河清、洛無埃。雲氣消、真人來。真人來、惟樂哉。時世易、好樂墮。真人去、與天回、反未央。延年壽、□獨敖。世、望我、何時反。越湯漫、路日遠。㉒

先生從此去矣、天下莫知其所終極。蓋陵天地、而與浮明遨遊無始終、自然之至真也。鸚鵡不踰濟洛、不渡汶。世之常人、亦由此矣。曾不通區域、又況四海之表、天地之外哉。若先生者、以天地為卵耳。如小物、細人欲論其長短、議其是非、豈不哀也哉。㉓

（訓詁）

大人先生は蓋し老人なり。姓字を知らず。天地の始を陳べ、神農、黃帝の事を言いて昭然たり。其の生年の數を知らず。嘗て蘇門の山に居る。故に世は成之れを聞（閑）と謂う。性を養い壽を延し、自然と光を齊しくし、其の堯舜の事とする所を視ること、手中の若きのみ。萬里を以て一步と為し、千歳を以て一朝と為す。行くも赴かず、居るも處らず、大道を求めて寓する所無し。先生變に應ずるを以て順和し、天地を家と為す。運去り勢墮るるも、魁然として獨り存す。自ら以為

えらく、能く造化と推移するに足る、と。故に黙して道徳を探り、世と之れを同じうせず。自らを好む者は之れを非とし、識る無き者は之れを怪しみ、其の變化の神微なるを知らざるなり。而れども先生は世の非怪するを以て、其の務めを易えざるなり。先生以為えらく、中區の天下に在るは、曾て蠅蚊の帷に著くに若かず。故に終に以て事となさず。而して意を異方奇域に極む。遊覽して觀樂するは、世の見る所ならず。徘徊して終極する所無し。其の書を蘇門の山に遺して去る。天下其の如き往く所を知らざるなり。①

或ひと大人先生に書を遺りて曰く、天下の貴きは、君子より貴きはなし。服には常の色有り、貌には常の則有り、言には常の度有り、行いには常の式有り。立つときは則ち磬折し、拱するときは抱鼓するが若（一に「則」に作る）し。動靜は節有り、趨歩は商羽し、進退は周旋し、威規矩有り。心は氷を懷くが若く、戰戰慄慄として、身を束ねて修行す。日び一日を愼み、地を擇びて行き、唯だ遺失を恐る。周孔の遺訓を誦し、唐虞の道徳を歎じ、唯だ法を見れ修め、唯だ禮を見れ克む。手には珪璧を執り、足には繩墨を履き、行いは目前の檢と為さんと欲し、言は無窮の則と為さんと欲す。少くして郷閭に稱せられ、長じて邦國に聞こえ、上は三公を圖らんと欲し、下は九州の牧たるを失わず。故に金玉を挾み、文組を垂れ、尊位を享け、茅土を取り、聲名を後世に揚げ、功德を往古に齊くす。君王に奉事し、百姓を牧養

し、退きて私家を營み、妻子を育長す。吉宅を卜し、乃ち德祉を慮り、禍を遠ざけ福を近づけ、永く堅固ならんのみ。此れ誠に士君子の高致にして、古今不易の美行なり。今、先生は乃ち被髮して巨海の中に居り、君子の若きものと遠し。吾れ世の先生を歎（或いは「笑」に作る）き、之れを非るを恐る。行いは世の笑う所となり、身は自ら達するに由し無ければ、則ち恥辱と謂う可し。身は困苦の地に處りて、行いは世俗の笑う所と為る。吾れ先生の為にと取らざるなり。②

是に于いて、大人先生乃ち適然として歎ず（一に笑に作る）。雲霓を假りて之れに應じて曰く、若の尚ぶと云うは、何ぞ通せんや。夫れ大人は、乃ち造物と體を同じうし、天地と竝び生ず。浮世に逍遙し、道と俱に成る。變化散聚し、其の形を常とせず。天地は内に制域し、浮明は外に開達す。天地の永固なるは、世俗の及ぶ所に非ざるなり。吾れ將に、汝の為に之れを言わんとす。③

往者、天は嘗て下に在り。地は嘗て上に在り。反覆顛倒し、未だ之れ安固ならず。焉ぞ度式を失わずして、之れを常にするを得んや。天は因り、地は動き、山は陷み、川は起る。雲散震壞し、六合は理を失う。汝は又た、焉ぞ地を擇びて行き、商羽に趨歩するを得んや。往者、群氣存を争い、萬物慮を死に、支體従わず、身は泥土と為る。根は抜かれ、枝は殊れ、咸な其の所を失う。汝は又た、焉ぞ身を束ね、行いを修め、磬折抱鼓するを得んや。④

李牧は功あれども身死す。伯宗は忠なれども世絶つ。進んで利を求めて以て身を喪う。爵賞を營めて家滅ぶ。汝は又た、焉ぞ金玉を挟むこと萬億にして、君上に祇奉して妻子を全うするを得んや。且つ汝は、獨り夫の虱の褌の中に處るを見ざるや。深縫に隠れ、壞絮に匿れ、自ら以て吉宅と為すなり。行くも敢えて縫際を離れず。動くも敢えて褌襠より出でず。自ら以て繩墨を得んと為すなり。飢うれば則ち人を噛み、自ら以て食に窮する無しと為すなり。然れども、炎斤(听)火流し、邑を焦がし、都を滅さば、群虱は褌中に死して、出る能わず。汝が君子の區の内に處ると、亦た何ぞ夫れ虱の褌中に處ると異ならんや。悲しいかな。而るに乃ち自ら以為えらく、禍を遠ざけ、福に近づき、堅きこと窮まるなし、と。⑤

○李牧：『史記』列傳、廉頗藺相如列傳二十一には、趙の北辺の名將と記される。李牧は匈奴や秦軍を撃破したが、最後には秦の謀略による趙の奸臣の讒言により、趙王によって斬殺された。

○伯宗：春秋時代の晋の政治家。景公・厲公に仕えた。賢臣として知られるが、最後には厲公によって殺され、その子孫も殺された。

亦た夫の陽鳥は塵外に遊びて、鶴鶴は蓬芝に戯るるを觀るに、小大は固より相い及ばず。汝は又た、何を以て若き君子を余に聞くを為すか。且つ近きは夏は商に喪ぼされ、周は之れ劉に播わる。耿薄は墟

と為り、豊鎬は丘と成る。至人來たりて一顧するに、世代相い酬わる。厥の居は未だ定まらざるに、他人已に汝の茅土を有す。將た誰か與に久しくせん。是を以て至人處らずして居り、修めずして治む。日月を正と為し、陰陽を期と為す。豈に情を世に希い、累を一時に繋がんや。東雲を來たらせ、西風に駕す。陰と雌を守り、陽に據りて雄を為す。志は得て欲は從い、物之れを窮する莫し。又た何ぞ自ら達すること能わずして、夫の世の笑うを畏れんや。⑥

昔天地開闢し、萬物竝び生ず。大なる者は其の性を恬んじ、細なる者は其の形を靜む。陰は其の氣を藏し、陽は其の精を發す。害も避くところなく、利も争う所無し。これを取つても失なわず、これを收むるも盈たず。亡するも天と為さず、存するも壽と為さず。福は得る所無く、禍は咎むる所無し。各其の命に従い、度を以て相い守る。明なる者は智を以て勝たず、闇なる者は愚を以て敗れず。弱き者は迫を以て畏れず、強き者は力を以て盡くさず。蓋し君無くして庶物定まり、臣無くして萬事理まる。身を保ちて性を修め、其の紀に違わず。惟だ茲れ若く然り。故に能く長久す。今、汝は音を造りて以て聲を亂し、色を作りて以て形を詭ます。外は其の貌を易え、内は其の情を隱す。欲を懷きて以て多きを求め、詐偽して以て名を要む。君立ちて虐興り、臣設けられて賊生ず。禮法に坐制し、下民を束縛す。愚を欺き、拙を

誑かす。智を藏し、自ら神とす。強き者は睨睨して凌暴し、弱き者は憔悴して人に事う。廉を假りて貪を成し、内は險にして外は仁なり。罪至るも過ちを悔いず。幸遇すれば則ち自ら矜る。此れを馳せて以て奏除す。故より滔滯して振わす。⑦

夫れ貴無ければ、則ち賤者は怨まず。富無ければ、則ち貧者は争わず。各身に足りて求むる所無し。恩澤は歸する所無ければ、則ち死敗は仇する所無し。奇聲作さざれば、則ち耳は聽くを易えず。淫色顯かならざれば、則ち目は視るを改めず。耳目相易改せざれば、則ち以て其の神を亂すこと無し。此れ先世の至り止まる所なり。今、汝は賢を尊びて以て相高くし、能を競いて以て相尚くす。勢を争いて以て相君とし、貴を寵して以て相加う。天下を驕りて以て之れに趣かしむ。此れ上下相殘う所以なり。天地萬物の至れるを竭して、以て聲色無窮の欲に奉ず。此れ百姓を養う所以に非ざるなり。是に于いて、民の其の然るを知るを懼る。故に賞を重くして以て之れを喜ばし、刑を嚴しくして以て之れを威す。財置すも賞供せられず、刑盡くすも罰行なわれず。乃ち始めて國を亡ぼし、君を戮し、潰散の禍有り。此れ汝が君子の爲すに非ざるか。汝が君子の禮法は、誠に天下の殘賊、亂危、死亡の術なるのみ。而るに乃ち自ら以て美行、不易の道と爲す。また過たずや。⑧

今、吾れ乃ち天地の外に飄飄し、造化と友と爲り、朝に湯谷に喰い

夕に西海に飲む。將に變化遷易し、道と周始せんとす。此れは之れ、萬物において豈に厚からずや。故に自然に通ぜざる者は、以て道を言うに足らず。昭昭に聞き者は、與て明に達するに足らず。子の謂いなり。⑨

先生既に若き言を申ぶるに、天下の奇を喜ぶ者は之れを異とし、愴懐する者は之れを高しとす。其れ其の體を知らず、其の情を見ず。耳を其の道に猜ひ、虚偽の名あり。其の眞を識る莫く、其の情に達せず。異として之れを高くし、與に之れに嚮うと雖も、非怪する者は蔑如たり。⑩

至人なる者は、乃の貴を知らず、乃の神を見ず。神貴の道は内に存して、萬物は外に運らす。故に天下終れども、其の用を知らざるなり。⑪

道乎なる有宗(或いは「宋」に作る)の扶淫の野に隠し有り。之れを見て喜ぶ。自ら以てえらく、志を均しくし行いを同じくするなり。と。曰く、善きかな。吾れ之れが見を得て、憤りを舒べん。上古の質樸、淳厚の道は已に廢れ、末枝の遺華は並び興くる。豺虎は群物の無辜を貪虐し、害を以て利と爲し、性を殞し、軀を亡ぼす。吾れ見るに忍びざるなり。故に、去りて茲に處る。人は與に儻と爲すべからず。木石と糲を爲すに若かず。安期は蓬山に逃れ、角李は丹水に潛む(一に「山」に作る)。鮑焦は立ちて以て枯槁し、萊維は去りて追かに死す。

亦た茲に由るかな。夫れ吾れ將に志を抗げ、高きを顯かにし、遂に斯に終わらんとす。禽のごとく生き獸のごとく死し、形を埋めて骨を遺す。復た余の生を反さざらんか。夫れ志ざしを均しくする者は相求め、好み合う者は齊しく與す。夫子は之れを同じうす、と。⑫

○安期：安期生。蓬萊山の仙人。『史記』封禪書などにその名が記される。

○鮑焦：隱者。『莊子』雜篇・盜跖第二十九には、鮑焦は行いを飾り、世を非り、木を抱きて死す、とある。

是に於いて、先生乃ち虹霓を舒べて、以て塵を蕃くす。雪蓋を傾けて、以て明を蔽う。瑤厖に倚りて徘徊し、眾轡を總べて安行す。顧みて之れに謂いて曰く、太初の真人は惟れ天の根なり。氣を専らにし、志を以て、萬物以て存す。退くに後を見ず、進むに先を觀ず。西北に發きて制を造り、東南を啟きて以て門を為る。道微ければ、徳を以て久しく娛樂す。天地に跨りて尊に處る。夫然として吾が體を成すなり。是を以て、物を避けずして處れば、觀る所は則ち寧し。物を以て累と為さざれば、迫る所は則ち成る。彷徨して、以て其の意を舒ぶるに足る。浮騰して、以て其の情を逞にするに足る。故に至人は宅無くして、天地を客と為す。至人は主無くして、天地を所と為す。至人は事無くして、天地を故と為す。是非の別無く、善惡の異無し。故に天下は其

の澤を被りて、萬物熾んなる所以なり。夫の彼を惡みて吾を好み、自らを是として人を非とするが若きは、忿激して以て争いて求め、志を貴んで身を賤しむ。伊れ禽のごとく生きて、獸のごとく死す。尚お何をか顯らかにして榮を獲んや。悲しいかな、子の心を用うるや。安利を薄じて、以て生を忘る。名を要求して、以て體を喪う。誠に彼と其れ詭う無し。何ぞ枯槁して、追死せんや。子の好む所、何ぞ言うに足らんや。吾れ將に子を去らんとす、と。⑬

乃ち眉を揚げて目を蕩し、袖を振りて裳を撫で、轡を緩めて策を縦にせしむ。遂に風のごとく起りて雲のごとく翔ける。彼の人は、之れを瞻みて泣を垂し、自ら其の志を痛む。草木の皮を衣、巖石の下に伏し、終夕にして死せざるを懼る。⑭

先生、神宮を過りて息み、吳泉に漱いで行く。迫に廻りて遊覽す。早に薪する者を見て歎じて曰く、汝は將た焉ぞ是れを以て終えんか、と。薪する者曰く、是れもて我を終えんか。是れを以て我を終えざるか。且つ聖人は懷い無し。何ぞ其れ哀まん。夫れ盛衰變化は、常に茲に於いてせず。器を身に藏し、伏して以て時を俟つ。孫は足を則られて以て龐を擒にす。睚は脇を折りて乃ち休す。百里は困しみて贏に相たり。牙は既に老して周を弼く。既に顛倒して、更に來たる。固より先に窮して、而る後に收む。秦は六國を破り、其の地を并兼し、諸侯を夷滅す。南面して帝と稱し、盛色を誇り、靡麗を崇ぶ。南山を鑿ちて以て闕と



記される。

先生之れを聞き、笑いて曰く、大に及ばずと雖も、小を免るるに庶し、乃ち歌いて曰く、天地解け、六合開く。星辰貫ち、日月墜つ。我勝りて上る。將た何をか懷わん。衣は襲ねずして服美なり、佩は飾らずして自ら草かなり。上下に徘徊し、誰か吾が常を識らんや、と。⑬

遂に去りにて返かに浮き、雲攀を肆にし、氣蓋を興す。徜徉して滌瀟の外を回翔す。長星を建てて以て旗と為し、雷霆の破確を撃つ。不周を開きて、車を出し、九野の夷泰に出（一は「歩」に作る）づ。中州に坐して一顧し、崇山を望みて廻り邁く。余が節を端して飛旆し、心慮を荒裔に縦にす。前者を擇（或いは「釋」に作る）めて修めず、蒙間を馳せて遠く邁く。世務の眾為を棄て、何ぞ細事を之れ頼むに足らん。形体を虚くして輕舉し、精は微妙にして神は豊かなり。夷羿に命じて日を寛くせしめ、忻來を召して風を緩くせしむ。扶桑の長枝に攀りて、扶搖の隆崇に登る。潛飄の冥昧に躍り、光曜の昭明に洗う。衣裳を遣りて服せず、雲氣を服して遂に行く。朝には駕を湯谷に造し、夕には馬を長泉に息わしむ。時に崦嵫して氣を易え、若き華を輝かせて以て冥を照らす。朱陽を左にして以て塵を擧げ、玄陰を右にして以て旗を建つ。容飾を變えて度を改め、遂に騰竊して以て修征す。⑭

陰陽更りて代り邁き、四時奔りて相い邁く。惟だ仙化は之れ倏忽に

して、心は久しく留まること樂わず。驚風奮いて樂さを遣れ、雲起ると雖も、憂いを忘る。忽ち電消えて神道み、寥廓をへて遐かに邁く。日月を佩して以て光を舒べ、登りて徜徉して上浮す。前を壓して彼の迫に進み、將に足を虛州に歩ませんとす。紫呂を掃きて席を陳べ、帝室に坐して忽ち會酬す。眾音を萃めて樂を奏すれば、聲は驚渺して悠悠たり。五帝舞いて再び屬し、六神歌いて代わるがわる周し。樂は歌吹肅肅として、心を洞ぬき神に達す。超遙茫茫として、心往きて反るを忘る。慮は大にして志は矜局（或いは「粵」に作る）なり。大人微れて復らず、雲氣を揚げて上陳す。大幽の玉女を召し、上王の美人に接す。雲氣の迫暢を體し、太清の淑真に服す。歡情を合わせて微かに授け、豔溢を先にする事其れ神の若し。華姿輝いで以て俱に發し、采色煥きて其れ並び振う。玄髻を傾けて鬢を垂れ、紅顔を曜かして自ら新にす。時は曖曖して將に逝かんとし、風は飄飄として衣を振う。雲氣解けて霧離れ、靄は奔散して永歸す。心は惘惘として遙かに思い、眇かに目を廻らせるも啼かならず。清風を揚げて以て旗と為し、旋軫を翼として反行す。炎陽を騰げて疆を出で、祝融に命じて遣わしむ。玄冥を驅りて以て堅を攝り、蓐收は乗りて戈を先にす。句芒は轂を奉じて浮驚す。朝霞は寥廓茫茫として都に靡き、遼かに儻無くして獨り立つ。瑤厖に倚りて一顧し、下土の憔悴を哀れむ。是非を分かちて以て行と為し、又た何ぞ與に比類するに足らん。霓旌飄が



えり雲旗霽かせ、遊ばんことを棄てて天外に出づ。⑬

大人先生被髪して鬢を飛ばし、方離の衣を衣、絨陽の帯を繞らす。奇芝を含み、甘華を嚼み、浮霧を噀み、霄霞を飡う。朝雲に興り、春風に颯り、太極の東に奮い、昆侖の西に遊ぶ。轡を遺れ、策を墮とし、唐虞の都に流盼す。惘然として思い、悵爾として忘るるが若し。⑭

慨然として歎じて曰く、嗚呼、時は歳に若かず。歳は天に若かず。天は道に若かず。道は神に若かず。神なるものは自然の根なり。彼の句句たる者は、自ら以て夫の世を貴しと為す。而れども惡そ夫の世の茲より賤しきを知らんや。故に世と貴を争うも、貴は尊ぶに足らず。世と富を争うも、富は先とするに足らず。必ず世を超えて群を絶え、俗を遺れて獨り往かん。太姑の前に登り、忽漠の初めを覽る。慮は無外に周流し、志は浩蕩して遂に舒ぶ。四運に飄颻し、翻りて八閤に翱翔す。從肆して彷彿し、浣澆して拘せられ靡らんと欲す。細行は以て毀と為すに足らず、聖賢は以て譽と為すに足らず。變化移易して、神明と與に扶く。無外を廓て以て宅と為し、宇宙を周らして以て慮と為す。八維を強くして安きに處り、制物に據りて以て永居す。夫れ是くの如きは、則ち富貴と謂う可し。是の故に堯舜と徳を齊くせず、湯武と功を並べず。王許は以て匹と為すに足らず、陽丘とは豈に能く與に比び縦にせんや。天地すら且つ其の壽を越ゆること能わず。廣成子とは曾て何ぞ容を並ぶるに足らんや。八風を激して以て聲を揚げ、元吉の

高蹤を躡む。九天を被きて以て開除し、雲氣を來らして以て飛龍を馭る。上下を専らにして以て制統し、古今を殊ちて同ずること靡し。夫れ世の名利は、胡ぞ之を累わずに足らんや。故に齊を提げて楚を蹶み、趙を撃けて秦を蹈む。一朝に滿たずして天下に人無く、東西南北之れに與に鄰となる莫し。悲しいかな、子の修飾するは。余を以て之れを觀れば、將た焉ぞ存せんや。⑮

○廣成子：『莊子』外篇、在宥第十二には、黃帝が空同山の廣成子に尋ねた至道の精に関するやりとりが記される。他にも、『淮南子』詮言訓などにその名が記される。

茲に於いて、先生乃ち之れを去り、決莽に紛れ、沕洋に軌う。衍溢に淫い、重淵に歴度す。青天に跨がり、顧みて迫かに覽る。則ち逍遙して以て年を永くする有り。忽合を存して散じて下る無し。分離して蕩たるに臻り、澆澆洋洋たり。飄涌（一に「踊」に作る）き、雲浮かび、搖光に達す。直ちに太初の中に馳騫して、無為の宮に休息す。太初とは何如。後ること無く、先んずること無し。其の極を究むる莫し。誰か其の根を識らんや。邈渺綿綿とし、乃ち反復するか。大道の存する所は、其の究に暘する莫し。誰か其の根を曉らんや。九靈を辟きて求索するも、曾て何ぞ自ら以て隆くするに足らんや。其の萬天を登りて通觀し、大始の和風に浴す。溲として逍遙して以て遠迫す。大路

の無窮に達し、太乙を遺てて使わず、天地を陵えて徑行す。濛濛を超えて迹を遠ざく。左は蕩莽として涯無く、右は幽悠として方無し。上は遙かに聴くも聲無く、下は修く視るも章無し。施す有無くして神を宅し、太清に永くして敖翔す。崔巍たる高山は玄雲を勃こし、朔風は横厲して白雪は紛たり。積氷陵の若くにして、寒は人を傷る。陰陽位を失いて日月隕る。地坼け石裂けて、林木摧かる。大いに冷えて陽凝り、寒は懷を傷る。陽和微弱にして隆陰竭く。海凍りて流れず、綿絮折る。呼喚通ぜず、寒傷裂す。氣并ざりて代わりて動き、変は神の如し。寒倡え熱隨いて、人を害傷す。熙きかな、真人は太清を懷う。②2

精神專一にして、意を用いること平かなり。寒暑傷る勿きは、驚かざる莫し。憂患由る靡く、素氣寧し。浮霧は天を凌ぐも、経る所を恣にす。往來微妙なるも、路傾く無し。好樂は世に非ざれば、又た何をか争わん。人は且に皆死せんとするに、我は獨り生く。真人遊びて、八龍に駕し、日月を曜かして、雲旗を載せて、徘徊して追き、之を樂しむ。真人遊ぶに、太階夷にして、□原辟き、天門開く。雨濛濛として、風颺たり。黄山に登り、出でて栖遲す。②3

江河は清く、洛は埃無し。雲氣消えて、真人來たる。真人來たるは、惟れ樂しき哉。時に世易りて、好樂隕ゆ。真人去りて、天と回り、未央に反る。年壽を延ばし、□獨り敖ぶ。世、我を望むも、何れの時に

か反らん。越くこと溟渤として、路日に遠し。②4

先生此こ從り去り、天下其の終極する所を知る莫し。蓋し天地を陵て、浮明と遨遊し、始終無からん。自然の至真なり。鸚鵡は濟洛を臨えず、汝を渡らず。世の常人は、亦た由お此くのごとし。曾て區域に通ぜず、又た況わんや四海の表、天地の外をや。先生の若きは、天地を以て卵と為すのみ。如し小物、細人其の長短を論じ、其の是非を議するは、豈に哀しからずや。②5

#### 四、解説

「阮籍は、「大人先生傳」でなにを語りたかったのか。

先に挙げた平木康平の「大人の思想—阮籍の世界」をもとに、その概要を解説する。

「大人先生傳」は、阮籍がみずからの「胸懷の本趣」を吐露したものであり、大人先生とは阮籍がみずからの理想をそこに托したところの、理想化された彼の分身であるといえるものである。

全体の構成を見てみると、前半部分でそれぞれ相異なる思想的立場をもつ三人の人物を登場させ、つぎつぎに議論の応酬をしている。最初のひとりには、伝統的な儒教思想を尊奉する君子、つぎは世俗を厭離して山野に孤棲する老莊的隱逸、もうひとりには、易の思想を体して俗

世を一時的にさけて時運の到来するのをまつ新者である。この三者に對し、大人先生が順次、その愚昧さと浅薄さを指摘し、彼らに對する痛烈な批判を通して、みずからの思想を披歴していくという体裁をとる。

後半部分は、大人先生が時間と空間を超越した世界を自由自在に飛翔するさまを、極めて悠大なスケールの格調高い韻文体で描きだしている。

最初に大人先生が議論をかわす相手は、儒教道德の絶対性を信じて疑わない君子である。この人物にとって、道德的価値だけが人間を支える唯一の絶対的な拠り所であり、彼は儒教道德を文字通り金科玉条のようにあがめ、ひたすら東身修行し、家をととのえ、国を治めることのほか、念頭にない。そしてみずからの生活するこの歴史的世界が、彼の世界のすべてであり、この人間社会の構造は永久不変であると固く信じこんでいる。

これに對して、大人先生は真実の世界の構造と人間の本質とを語りきかせ、君子がいかに虚妄の世界に住み、いかに人間と世界の本質に暗いかを解き明かしていく。大人先生の起居する世界は、時間的にも空間的にも通常の人間の考える世界とはまったく比較を絶した無限の広がりを持っている。

二番目に大人先生と出会って問答するのは、扶搖の野に世を避ける

隱士である。彼は現実世界を虚妄と断じて世俗に幻滅し、世俗の外におのれの世界を打ち立てようとした。これに對して、大人先生にとつて、天地はすべておのれの居宅であり、その世界は差別の相を越えているがために、住む所を選ぶことはない。また主客の対立の生ずる以前の世界に居止するために、そこには主人もなく客人もない。まして主人がそこを出ることもなく、客人がそこに入ることもない。ここには是非の差別もなく、善悪の相違も入り込む余地がないと大人先生は説く。世俗と絶縁し、山中の劣悪な環境のなかで、ことさらわが身を苦しめ禽獸に等しい生活を送る隱士は、みずからを是として他を非とし、みずからを高しとして他を卑しんでおり、なお彼我の見にとらわれ、差別と鬭争の相対的世界から決然と離脱することができないでいると、大人先生はいふ。

大人先生が出会う三番目の相手は、丘のうへで薪を伐る人物である。この新者はさきの隱士と同じく世俗を避けて山野に隱棲する隱逸である。さきの隱士とこの新者はおなじく隱逸でありながら、兩者に對する大人先生の評価に大きな落差が生じている。その理由は、隱士が世俗を嫌悪するあまり世俗の外に執着し、なお差別の知見に囚われて融通性がかけていたのに對して、薪者が世俗の内外の一方に偏執せず、時勢の推移に応じて世俗の内にも外にも自由に出入りする柔軟性を具えていた点にある。

「大人先生傳」の約半分を占める後半の部分では、大人先生が薪者の言葉にこたえるかたちで、みずからの境涯を長短の句をおりこんだ歌に託して雄壮に語りあげる。大人先生の境涯は、これまで彼が出会った君子や隱士に対する批判ですでに述べられてきたが、最後に時空を超越した宇宙天外を逍遙する大人の描写を通じて、象徴的に表現されている。大人先生は、ありとあらゆる一切の事象を永遠の時間と無限の空間に照射することにより、すべての差別対立の相を消散させ、絶対無差別の世界をいったん踏まえたいうで、さらにこの絶対無差別の世界をも消散させてしまおうとする。

こうして、大人先生は絶対無差別の世界からさらに翻転して、差別が即無差別、無差別が即差別であるような、差別と無差別とを同時に内に包み込んだ世界に参入していくのである。そして、そこに随處に主となる主体性を失わず、自由自在に働く境地を切り開いた。これが大人先生思想であり、阮籍の世界であった。

## 五、おわりに

阮籍は、もともと濟世の志をもっていた。しかし、魏晋の際は天下に権力争いが激しく、名士でその命を全うできる者は少なかった。漢王朝の没後、天下は魏・呉・蜀に三分され、その間に勢力争いは絶えず、

さらに阮籍の属した魏の内部でも、王室曹氏の一派と司馬氏の一派とが、血で血をあらう熾烈な権力闘争を繰り返していた。そのため、阮籍はできる限り世事に関与せず、酒に浸る生活が続けるようになった。

時の権力者司馬昭は、その息子司馬炎のために、阮籍の娘を迎えようとしたが、阮籍が六十日間も酔っ払い続けていたので、ついにその話を切り出すことができなかった（『晋書』卷四十九、列傳第十九、阮籍）。このように酒に酔い続けた阮籍であったが、まったく手放しで酔っぱらっていたわけではない。どんな場合でも、かならずどこか一点醒めた冷たい目で、自分自身と自分の周囲をじっと見つめていた。

胸中に去来するさまざまな感懐を五言詩に託して表現したのが、「詠懷詩」八十二首である。この「詠懷詩」は、一時の作ではなく、平生折にふれて作った詩を集めたものである。阮籍は、人と話をするときは、いつも言葉が玄遠で、人物評論を口にしたことがなく、天下の至人と称せられたが、その詩も筆禍をおそれて、直截的な表現を避けているため、難解な個所が少なくない。

「詠懷詩」は、いくつかの問題をはらむが、その中でとくに注目したい点がある。それは、外なる世界の現象や現実社会の動向に注がれていた阮籍の眼が、時に反転して内なるおのれの存在、ひいては人間存在の根底に振り向けられていることである。つまり、阮籍が「人間とは、そもそも何か」という、きわめて根源的な問いを自分に向けて

発していることである。

たとえば、「哀しいかな、人の命の微なる、飄々として風塵の近くがごとく、忽として慶雲の晞あびるがごとし」（其の四〇）<sup>(6)</sup>と歌い、人の生命のはかなさ、人間の嘗為のむなしさを痛感していた。

かくして、生命の短促なることの自覚は、やがて永遠の存在としての神仙に対する願望をひき出してくる。「独り延年の術有り、以て吾が心を慰むべし」（其の一〇）といった神仙世界の憧憬を、繰り返し描いている。しかし、果たして人間が不老不死の神仙になりうるのか、という点になると、はなはだ懐疑的である、というより否定的であった。

さらに、翻って考えてみるに、人間は一樣に長生を願うけれども、いったい長生して何を目指さんとするのか、と問いかけて、「人は言う、年を延ばさんことを願うと。年を延ばして、いづくにか之かんと欲する」（其の五五）という。ここには、「人間はどこから来て、どこへ去っていくのか」という、人間の生存の内外にまたがる大きな問題が提起されている。それに対する阮籍の答えが、「大人先生傳」のなかに示されているといえよう。

## 註

(1) 平木康平「大人の思想―阮籍の世界」〔『東洋学論集』森三樹

三郎博士頌壽記念事業会編、朋友書店、一九七九年）三八九―四〇八頁

(2) 馬場英雄「阮籍「大人先生傳」の諸相」〔『大東文化大學漢學會誌』

五十一号、大東文化大學漢學會、二〇一二年）一四一―一六二頁

(3) 大上正美「達莊論」と「大人先生伝」〔『研究叢書』第一三号、

青山学院大学総合研究所人文学系研究センター、一九九九年）一―二十五頁

(4) 福永光司「阮籍における懼れと慰め―阮籍の生活と思想」〔『東

方学報』京都二八、京都大学人文科学研究所、一九五八年）一三九―一七四頁

(5) 卷四十六「大人先生傳」〔『全三國文』世界書局、一九六三年（民

国五十二年）

(6) 黄節注「阮步兵詠懷詩注」〔『魏晉五家詩注』、世界書局、

一九六二年）による。以下も同じ。